無題(仮・第五章)

中根辰栄

《前回までのあらすじ》

記憶喪失である山田の記憶を取り戻そうと、フラッシュバックを起こした時間のテレビ番組から手掛かりを探る赤江記者。娘の紅羽の手伝いもあり、韓国への渡航経験があると思われる事が分かった。

一方、赤江は新たな問題を抱えていた。山田の記憶喪失に対して、本当に取り戻すよう促すことが正しいのかということだ。記憶喪失の要因となったことすらも思い出させることは、むしろ一人間として罪深い行為なのではないか。

彼の葛藤の行く末に何があるのか。そして、山田浩平とは、何者なのか。

《お詫び》

作者の論理ミスにより、全話を通じた日付の設定に大きな誤りが見つかりました。現在、原稿の方で訂正は済んでおります。訂正版は、全章次号の最終話と共に掲載させていただきます。

ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございません。

※※※

二十日の取材で聞き取った内容は、しっかりと今日の記事になっていた。自分が見聞きした内容が二流三流のものとはいえ、記事として文字になったのだ。なんとも言えない不思議な感覚と一緒に、ちょっぴりの優越感みたいなものを感じた。

「あ」

この前休んだから、つぎの授業で出す課題があるなんて知らなかった。友達に聞いておけば良かったのに、たかをくくってそんなもの無いと思い込んでしまっていた。気づいたのが三十分前で間に合うはずもなく、正直に忘れたというしかない。こっぴどく叱られるのは目に見えている。なにせ先生が怖い。

「うーん……」

いっそのこと仮病でも使って休もうか。正直だるい。先生のやり方も気にくわないし、態度も悪い。クラスの評価も同じようなもので、仕方がないから出てやってるよ、といった感じである。

スマホの通知が鳴った。

「お父さん？」

余程のことじゃない限り連絡をよこすことはない。案の定画面を開くと、最後に話したのが電車の大きなダイヤ乱れがあった数か月前で止まっていた。

その下に、ひとことだけこうあった。

「記事の連載がもうできないかもしれない」

何があったのか。先週の取材では、何も問題がなかったはずだ。山田さんの体調も健康そのものだったし、記事も何事もなく今日発表されたばかりなのに。

どうしたの、と返事をした。既読はすぐについた。また返答があった。

「帰ったら話す」

よっぽど複雑なことがあったのだろうか。今朝も何時もと同じように家を出た。たぶん父本人のせいではないだろう。ならやっぱり、山田さんに何かあったのだろうか。

そこに、チャイムの音が意識を遮ってきた。数学の授業が目前に迫ってきた。内心は方程式だの定理だのを押し込まれる余裕なんてない。ため息だけ漏らし、意識は外に行ったままでいいからと、なくなく五十分をノート取りに費やそうと決めていた。

……

ちゃっちゃと帰り支度を済ませ、急ぎ足で帰った。単語帳にも、文法書にも目は通せなかった。ただただ、父親の書く記事についてだけが、頭をめぐっていた。

「ただいま」

父親の革靴が、いつものように程よくぐちゃっとして置かれていた。

「おかえり」

居間のテーブルに、PCだけを置いて座っていた。夕食の買い出しまで済ませていた。

「なに、お父さん料理するの」

「まあ今日は、早かったから……」

「早上がりしたの？」

珍しい。九時五時の勤務がやっぱり性に合うんだ、とよく言う人が早上がりなんて変な感じだ。

「まあな」

「それって、やっぱり……」

「……そういうこと」

人間、落ち込むときには休みが要なんだよ、とぼそりと呟いた。

「どうしたの、突然休載って？」

「……実はな」

「うん」

沈痛な面持ちがにじみ出ていた。私には表情が出やすい人だけれど、マイナスの感情を見せることは正直珍しかった。

「山田さんがな」

「どうしたの？」

「……取材拒否に入ってな」

「え？」

※※

「え、それってどういう？」

出社早々、編集長の口から出た言葉。

「言ってるでしょ？例の山田さん、しばらく取材は受けられないって昨日夜に連絡があったのよ」

「理由は」

「そんなの聞いてどうしようってのの。まあ理由としては、精神的な問題がどうとか、って」

「先週までは問題がなかったはずでは」

「それは先週までの話。そんなのコロリと変わってもおかしくないでしょ。とにかく、例の連載は一旦休止。第五回の取材は無期限延期ってことで」

「しかし」
「あんただってわかってるでしょ、取材対象の尊厳を優先しなきゃいけないのは」
「それは当然です。けど」
「とにかく！今日からしばらくは、この前みたいに後輩君とかの補助に入って」
もう、致し方ない事はわかっていた。だが、ここまで来て、記憶を呼び戻す手掛かりすらも手元に揃ったというのに、そこで地団太を踏めというのは酷だった。
小一時間何にも手を付けられず、胸元のタバコに手を付け、喫煙所へと向かった。
「先輩」
後輩だった。ジョン・カーターに関する記事は既に出し終え、今週から来週でまた新しい関連記事を書いているらしかった。
「お前、タバコ吸うんだっけか」
「言ってませんでしたっけ。普通に吸いますよ」
「そうか……」
一口メビウスに口を付けた後輩がこちらを覗いた。少し考えて、口を開いた。
「連載の件ですよね」
「……知ってたのか」
「昨日校正作業あって遅くまでいたので。編集長から少し話は聞きました」
「……無気力になったよ、正直」
「まあ連載通ったあと、順調にここまで来てましたからね」
「どうにもわからない。なんで突然取材拒否なんかに」
「……あれじゃないっすか」
「え？」
「もう、記憶戻ったんじゃないですか」
「は？」
「戻ったせいで、これ以上話すのがしんどくなったとか」
「でもこの前の取材では」
「それから何日経ちました？……ちょうど一週間でしたよね。あれから頭の中で取材の事が整理されて、いよいよ記憶と結びついた。そう考えられません？」
「……どうかな」
「だからこれ以上の取材は限界だと思って、取材拒否に至った。そう考えるのも出来んじゃないですかね」
「じゃあ、俺の連載はこれで終いにしたほうがいいってわけか」
「あ、でも」
「うん？」
「取材拒否、ってのも妙ですよね」
「ていうと？」
「山田さん、ここまで取材に同意してきたんですよね。だったら記憶が戻っても、正直に話してくれそうなもんじゃないですか」
「いや、戻ったからこそ話したくないんだと思う」
「どういうことっすか」
「戻った内容だよ」
「え？」
「あまりにも酷な内容だった。そんなだったら、話さずに終いにしたほうが自分以外誰も傷つかないでいいんじゃないか、って」
「……聞く側に配慮した結果、ですか」
「そ」
後輩の一本から灰がぽとりと落ちた。
「先輩に言っちゃなんですけど、連載はおじゃんってことですかね」
「……さあな」
「でも取材拒否っすよ？」
「山田さん側に何か変化があるかもしれない。俺はそれに賭けるよ」
「万に一つでも可能性があるなら、ってことっすか？」
「……俺は、山田さんが話してくれるのを待つ」
「それでこそ記者よ」
堂々と喫煙室に入ってきたのは、編集長だった。
「あ、どうも」
「赤江くん、よかったわ。あんたがそれぐらいの肝っ玉で」
「どういうことですか」
「あたしね、正直最初の段階で最後まで行けるのかなって思ってたのよ。あんたも曲がりなりにも所帯をもってるわけでしょ？」
「まあ、そりゃそうですけど」
「それで怖気づいてしまう気がしてたの、心の底で。取材対象が記憶喪失者なら、丁重な扱いをせざるを得ない。そんな時、取材を行う人はどうしても大変な立場になる。そんで、最終的には難しい局面に陥った時、逃げちまうやつだっていっぱいいる。でもあんたは違う。なにせ入社当時から世話してきた部下だしね。なんとなくでも心持ちのひとつやふたつ、わかるのよ」
「……曲がりなりにも十年は優に超えてますしね」
「そうそう。記者として、あんたは強い。そう思ってる。この局面で、こう言えるお前はいい記者だと思うよ」
「……ありがとうございます」
「赤江」
「はい」

「……お前が進む道は、お前が決めろ。だが、私はどっちに行こうが、後押ししてやるよ」
「俺は」
「なに？」
「……進みます」
「そ。んじゃ、やりな。私は止めないから」
「……はい」

※※※

「んで、お父さんは待ってあげるってわけ？」
「んまあ、そういうことになるかな」
出来合いの総菜に手を付けながら、事の次第を聞いた。父はその判断を下したけれど、正直ひっかかりが抜けないようだった。
「上の人たちは待ってくれるの？」
「編集長がかけあってくれて、とりあえず大丈夫らしい」
「うーん。でもそう言ってもさ、休載が長くなったらさすがに中止になるんじゃないの？」
「よほどの場合だとな。けど理由が分かりきってる以上、むやみには終われないだろうって。それに」
「なに？」
「読者アンケートっていうのがたまに来るんだけど、それなりに俺の連載が読まれてるらしくて」
「そうなんだ」
「うん。うちの雑誌の読者は、まあ他のやつと比べてもまだ読む世代が広いから。需要っていうかそういうところが、それなりにあるってのがわかるんだ」
「アンケートってお父さんも目を通せるの？」
「コメントがあるやつはね」
「どういう感じなの？」
「たとえば着眼点が面白く、他人事と思えない記事として読んでいるってのがあったな」
「そうだね。記憶喪失って意外なきっかけで起こることもあるらしいしね」
「そうそう。それに現にいまそれに悩まされている実際の人間としての山田さんって存在が読者には印象深いらしい」
「だからこそ他人事にはできないって感じなんだろうね」
「でもちょっと思うことがあってさ」
「なに？」
「一応雑誌の記事として彼に関する記録と調査を進めてるわけだろ？それってなんかある意味エンタメの一環みたいになってるんじゃないかって」
「読み手は字面で追うだけで、興味深いって言っても山田さんに寄り添って読むとか、そういう読者の記事に向き合う時の人間性が保証できないってこと？」
「難しい言い方するんだな。まあでもそういうこと」
「でもメディアってそういうもんなんじゃない？」
「え？」
「テレビも雑誌も、いまのＳＮＳでも、結局伝える手段を通してしか知れない事ばっかりじゃない？だからそこに、人間性を踏まえて知るってことを記者が必ず保証できるわけじゃない。だからその代わりに取材はその対象を優先して取材とその記録するわけだし」
「まあな」
「お父さんちょっと心配し過ぎじゃない？たしかに山田さんって人間を大事にしたい。だからあっちが取材拒否をしてきたらちゃんと踏みとどまって、周りももう少し待とうってなったわけじゃん。でも最初は山田さんだって思い出そうとか、ほんとうの自分自身のことを探してほしいって思ったからこそ取材が始まったんでしょ。だったらまたそのチャンスは来ると思うよ。そん時にお父さんが手を差し出さなくてどうすんの？読み手のこともそうだけど、取材を受けようって決めた山田さんと、それをくみ取ったお父さんのこと。これが一番大事なんじゃないの？」
「……たしかにな」
「でしょ？だったら責任もって最後までついていったげなよ」
「……だな」

※※

「お疲れ様です」
「よう」
後輩が出社してきた。手元には紙資料のケースをぶら下げていた。
「また記事の執筆か」
「まあ、家帰ってもなにがあるってわけじゃないですし。多少書き換えとかそういうのをやっておこうかなって」
「なるほど感心感心」
「あ、この前書いた例の物理学者ジョン・カーターに関する新しい記事なんですけど」
「へえ。読ませてよ」
「あ、どうぞ。なんか妙な動きを始めたみたいで」
そこにはこう書いてあった。
ジョン・カーター氏とその周辺人物たちが秘密裏になにかしらの製造を開始したことが判明した。右腕的存在であるキャサリン・ハインツ氏に関しては、特殊工具や

一般流通していない素材などを、莫大な費用を投じて入手しており、卸元いわく「実験や試作品への利用のためにしても、異常な量と焦り具合であった。なにかカーター氏に関する新しい行動のため準備を進めているのでは」と語った。具体的な品目についてはプライバシーポリシーにより明かされなかったものの、総額としては優に数百万を超えるとの事である。他の関係者としては、大学の研究室で補助などにあたっている学生や大学院生らも頻繁なカーター氏への接触、ならびに研究室への出入りが目撃されている。一部筋は学生ら数人へ接触を試みたものの、厳重なかん口令や大学側が彼らへ特別な配慮を施しているため、情報入手以前の問題であったとの事である。

「金にもの言わせて何を作ろうとしてるんだか」

「これで社会変わるかもしれませんよ。なんて」

「物理学の実験って言うとこんなに金がかかるものなのかね」

「ちょっと調べましたけど、分野によりけりってことみたいです。でもカーター氏の研究はどうやら実験とは縁遠い界隈らしいんです。だからなおさら変な目で見られてるそうで」

「それ記事に書いておけよ。おもろいから」

「あ……。そうっすね、これ書きます。分量増やそうかと思ってたんで。ありがとうございます！」

「んじゃ頑張って～」

後輩が少し先のデスクにつくのと同時に、編集長が慌ただしく入ってきた。

「お疲れ様です」

「おっす」

「忙しいんですか」

「編集会議が今日は立て込んでね。最初がもう一時間ないで始まるんよ。あ、赤江。タバコ行こうよ」

「あ、はい」

そそくさと喫煙所へと向かう。編集長が珍しくヒールを履いていて、カツンカツンと心地よく煙への中とあゆみを進めた。

淡い青色のパッケージを取り出す。編集長は真っ白のソフトボックスをまさぐり出した。

「あ」

「火、ありますよ」

「あんがと……。慌てて家なんか出るもんじゃないわ」

ターボライターを着火し、咥えた白く細い筒にあかりを灯す。

「……ははん。連載の件、なんかひと段落したな？」

「……ほんと編集長って、他人のこと察するの上手いですよね」

「ま、人が居なくちゃ記事なんて作れないんだし。人を見る眼は多少鍛えられたのかな」

「なんにせよ、編集長の言う通りです。昨日娘に説得されちゃいまして」

「ははぁ。子煩悩は大変ですな」

「もう高校生になりましたよ。この前の取材でも手伝ってもらっちゃいましたし」

「ああ、言ってたね。なんだっけ、取材で物持ちしてくれたんだっけ」

「そうなんです。学校どうすんだっていったら別にいいって」

「娘さんもあれかね、記者になるのかね」

「やめさせますよ、そんなこと言ったら」

「なんでよ。うちにきたら敏腕親子記者の誕生よ？いいネタにもなるし、会社としても話題性になるからいいと思うけどな」

「話題にされるこっちの身にもなってくださいよ。話題通り越して冷やかされますよ」

タバコに一度口づける。

「まあそんな娘に言われたんですよ。お父さんは記者なんだから、取材に同意した山田さんを待ってあげることも仕事なんだって」

「いやかっこいいこと言うねぇ。しかも的を射た意見だよ」

「書くことばっか集中してましたけど、取材相手を尊重して待つこともまた仕事のひとつって教えられるとは思いもしませんでしたよ。大人なのは娘の方だったのかもしれないですね」

「まあ高校生って微妙な年ごろだもんね。大人にもなりきれない。かと言って子供と言うには年が過ぎて、みたいな。だから基本子供抜け出せてない青臭ーい言葉の中に、たまーにうちらが忘れたような意識を呼び起こすことを言うから馬鹿にできない」

「ほんとそう思います。今回痛感しましたよ」

「……もしかしたらだけどさ」

「はい？」

「娘さん、独自で動くかもね」

「え？」

「いやなんとなくね、お前との取材に同行したって言ってたから。山田さんのいる施設の場所は把握してるんだろ？」

「そうですね、多分」

「んでさ、多分娘さんもそれなりに山田さんに関心があると思うんだよ。だってそもそも休みまで取って父親の

取材に行くんだよ？」
「まあ……確かに……」
「なら勝手に動くよ。取材が滞ってるって聞いたら多分いてもたってもいられなくなるんじゃない？あんたと同じくらいには」
「そうなったら、止めた方が良いんですかね」
「あー。難しいところだよね。正直うちらが関われる範疇じゃないから。取材外の出来事であるから取材うんぬんで止められるかっていわれると難しいわな」
「……方が一取材に影響出るようなら言っておきますね」
「ま、私は吉と出る方に見るけどね。血筋だよ、お前の」
「え？」
「おまえ、取材のうまいやつだから。血は争えないんだよなぁ」

※※※

結局、来てしまった。出かけのついでにと思って来てみたものの、いざ施設の目の前まで来ると変に緊張感がただよう。突然の取材拒否というのが珍しいのは、言葉が強いことからも明らかだった。一度取材に関わったとはいえ、ここまでして良いのだろうかとも思う。けれど、父親は待つことにしたとしても先に動く保証はない。なら自分からに行くことも、それも秘密裏にすることが必要なんじゃないのか。どうしてこんなことを考えたのかと聞かれたら答えられない。あやふやな心のままだったけれど、それでもやらなければという言葉がひっついて離れなかった。
正門をくぐり、事務所へと向かう。たしか園長先生がいて、その人に事情を話して通してもらうことにした。この前の取材でも同じようにして面会した。
玄関の右手にある事務室には、既に人の姿があった。
「ご、ごめんく、ださい……」
「どちら様でしょう」
「あ、あの実は、父から言伝てを預かってきまして……」
とっさに嘘をついてしまった。まずかったかも。
「ああ。赤江さんの娘さんですね。申し訳ないんですけど、本人は今メンタルの不調を訴えておりまして」
「あ、あの、いま山田さんの容体って……」
「からだの方は問題ないんですけれどね。どうも不安障害のような感じで」
「ど、どうしても面会はできないって感じですかね」
「そうですね。あ、伝言なら私が伝えておきますので」
「あ、はい、その……次回の取材をどうするかについてだったので……可能なら少しお話できればと思ったんですけど、無理ですよね」
「ああ、そうでしたか。本当に申し訳ないです」
「いいんです。仕方ないですよね。……あの、最近様子の変わったこととかありました？」
「え？」
「いや、正直突然取材拒否になったんで、父も私も驚いちゃって」
「そうなんですよね。私の方にも突然拒否するって連絡をしてくれって言われて」
「そうだったんですか」
「ええ。あ、立ち話もなんですから、部屋にどうぞ」
「よろしいんですか」
「ええ。お父様にもこちらの事情を伝えてもらおうと思ってましたから」
「あ、じゃあ失礼します」
事務室の隣にある応接室に通された。校長室みたいな、あの感じだ。
「お茶どうぞ」
「あ、ありがとうございます」
「しかしまあ、驚かれますよね。あんなに積極的に取材を受けてた山田さんがね。突然でしたから」
「それで、様子が変だったとかってありました？」
「前回の取材が二十日でしたよね。あのあと数日は別に何もなかったんですけど、たしか……十六日ごろだったかしら。突然私のところに来て、赤江記者の取材を当面止めてくれって。十三日、何かありました？」
「いや。……あ、でもあの時は記憶の手掛かりを探していて、庵路なものを見せてみたところだったんですけど」
「なるほど。……もしかして、なにか記憶に関わることがあったんじゃ」
「ああ。確か韓国に関連したパンフレットか何かを見せたら、行ったことがあるかもしれないって」
「……まさかと思うけど、記憶が」
「……！」
「それで、もうこれ以上喋りたくないと思ったのかしら。それだったら大変」
ありえなくはない事だった。けれど、正直取材拒否をするほどの記憶を取り戻したのだろうか。
「韓国に関連した記憶で、過去に何かあったのかも」
「そうですね。……もし思い出しているのなら、やっぱり今はそっとしておいてあげた方が」
「いい、ですよね……話せるときになってからでも遅くはないですからね」
「ええ。……あれ？」
「え？……あ！」

外の庭園に山田さんがいた。
「ここ何日かは最低限しか部屋を出てなかったのに」
「あ、私声かけてきます！」
「あ、ちょっと！」
いてもたってもいられなくなった。
「あ、山田さん！」
「……ああ、この前の」
「あ、あの、お話だけでも聞けないかと思ってきたんですけど……」
「申し訳ないですが、私から直接お話しするのは」
「それでいいんですか！」
「……え？」
「父はいつまでも待つって決めてます！そりゃ、記憶を取り戻してつらいのはわかります！」
「……」
「けど、もし、もし覚悟を決めてくれるのなら、私も、お父さんも、覚悟を決めて話を聞きに行きますから！」
「……くれはさん、でしたっけか」
「はい、赤江紅羽です……！」
「……くれはさんは、携帯電話、持ってる？」
「え、あ、はい、一応」
「……お父さんの前に、君に話をするかもしれない。だから、君の連絡先を知りたいんだけれど……」
「あ、あ、わかりました！ちょっと待ってください！」
スマホの連絡先を持ち合わせの小テストの用紙に書き殴り、山田さんに渡す。
「……ありがとう」
彼がちょっとほほ笑む。黒々とした瞳。立ち姿はこの前見た時よりも凛々しく、背筋の張りが紳士のようだった。和服を着たらシュッとして、涼しげな姿になるだろう。……やだ、何考えてるんだろ。
「あ、あ、あの、私そろそろ時間が」
「ああ、ごめんね。近いうちに連絡するかもしれないから」
「はい！待ってます！」
「……お父さんには、ギリギリまで秘密にしておいてね。君が怒られてしまうから」
「ご、ご親切にどうも……」
「あ、引き留めちゃったね。それじゃあ、また」
「はい……」
トボトボと帰っていく。園長先生にも挨拶をした。
「……まさかねぇ。偶然ってのもあるのね」
そう言っていた。

……私の中には一つの確信がある。そう遠くないうち。私も、父も。彼の真実を知ることになる。しかもあまりに残酷で、救いのない真実。

※

手元の紙切を何時までも見つめてゐた。窓際にはあの日から咲く健気なムギワラギクが数輪程夜空を見上げてる。
「くれはさん、か」
然るべき時を探していた気がする。元はと言えば二十日の取材からだった。あの日見つめた「モノ」に、最初は気掛り程度の感触が在つたのみだつた。あの一つだけ、何時迄経つても心の琴線を揺す振り、振動が徐徐に増していつた。数日もしなひ内に……。
私はいずれ、此の事に向かい合ふべきなのだ。然しこの数日は逃避ばかりに時間を費やした。だうすべきでもなひ。私が沈黙を通すことが、何も起こらず、誰しも負の感情を抱くこと無く、平穏に私と接することが出来る。何ら気兼ねなく、私は山田浩平として在り、此岸に居て良ひのだと感じ続けられる。さう、究極の平和である。
だが、あの子は、あの親子は、真実を知る覚悟がある。其れに応えることは、人間としての責務なのではないか？
真実の残酷たる性質は疑いやうもない。然し、その覚悟を持ち私に接する、其の意思を蔑ろにする事は、果たして最適解であらうか？
ムギワラギクの一輪が突如として折れた。突風のせいであつた。矢張、私には先に進むべき義務のやうなものがある。進むべきなのである。
私は停滞した存在だつたのだ。時間という概念の一方的な進行の中、私はあくまで停滞を余儀なくされた異常事態の最中に居る不可思議であつた。然し其れも、決断

を下すことで解放される。確かにそれが一概に、私自身の理想を形作る為の過程に必要であるとは考え難い。だが、困難や現実に、私の実存に向き合ふ事もまた必要な行為である。

此の高まりゆく気温と湿度、そして冷え行く現実に枯れ果てる前に、私は。

「明日。彼女に連絡をしないとな」

決意の後、寝床へと入る。……だが、一つだけ釈然としない事がある。

なぜ、私は「此処」に来る事が出来たのか？

※※※

一昨日の大胆な突撃は、連絡先を渡すというかなり大きな成果をのこした。しかも、間近に山田さんの姿を見るということまでしてしまった。何度も取材している父よりもまじまじと見つめた気がした。

その件のことはしっかりと内緒にした。多分記者というしっかりとした身分の人に対してだと、率直な気持ちが言いづらいと思ったのだろう、と考えている。そこに私がいるわけだ。なんとも鼻が高いというか、責任重大というか。

「……でも多分、少し時間がいるだろうなあ」

昼ご飯を食べながら、外の照り付ける日差しをみつめる。高校は既に夏休みで、家の中はクーラーで冷やしきっている。父も今日は仕事だ。お母さんも遠征があるとかでまたしばらくは帰ってこない。

「……課題もちまちまやらんとなあ」

アイスでもかじって、この部屋で涼みながら嫌いな英語の課題でもやろうかしら。

と思った矢先、スマホの着信音が鳴った。ＬＩＮＥじゃない。誰だろう。……もしかして？

「……もしもし？」

「くれはさん？私です。山田です」

「……もしかして」

「ええまあ。そういうことです」

「あの、ほんとこの前はすみませんでした」

「いいんです。取材拒否したのはお父さんにですし、なによりお二人の気持ちが知れたのは良いことでしたから」

「そうですか」

「……お近くにお父さんはいますか？」

「いえ、今日も仕事で」

「そうですよね。平日昼間ですしね。くれはさんは？」

「もう夏休みに入ってますから」

「そうでしたね。長期休暇の始まる時期ですよね今は」

「ええ」

「……くれはさん、まずあなたに感謝を伝えないといけない」

「え？」

「……この前のあなたの一声で、決断が下せましたから」

「ああいや、そんな大したものでは」

「それに」

「はい？」

「……あ、いや別に。ささいな話なのでお気になさらず」

「……はあ」

「ああ、それじゃあ要件を」

「あ、はい！」

彼の声がぐっと引き締まった。

単刀直入に申し上げます。

私はすべてをお話しします。

くれはさんと、御父様のみでいらして下さひ。

八月三日、施設の私の部屋でお会いしませう。